〈資料紹介〉翻刻『潤色江戸紫』（上）

翻刻の会

一、底本には関西大学図書館の七行九十九丁本を用いた。

二、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次のような校訂方針に拠った。

1　本文は文字譜を手掛かりにして、適宜改行を施した。ただし、道行・景事の類、会話の途中等では改行しなかった。

2　各丁の表・裏の終わりは、丁数の数字とオ・ウの略号を（　）で示した。

3　仮名は現行の字体に統一した。ただし、感動詞、送り仮名、捨て仮名の類以外の、本文中の「ニ」「ハ」「ミ」は「に」「は」「み」とした。

4　漢字は、一部の異体字を除いては、原則として通行の字体に統一した。

5　漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字、仮名遣い、清濁は底本の通りとした。

6　特殊な略体、草体、合字等は現行の表記に改めた。

7　畳字は、平仮名は「ゝ」、片仮名は「丶」、漢字は「々」に統一した。ただし、「〳〵」はそのまま残した。

8　文字譜の類はすべて採用し、本文の右傍の適切と思われる位置に翻字した。

三、本文の翻刻は、次に掲げる翻刻の会（学部学生の研究会）の会員によってなされた。

芦野陽子、浦野洋紀、太田楓実、釜丸祥、小林芙美、酒瀬川なおみ、柴田紘孝、中村梨恵子、西有幸、日當真心、布施あかり、水田千尋、横山知尋、吉村仁志。

節付、改行及び本文の最終確認は山田和人が担当した。

（山田和人）

備考

本書は『世話浄瑠璃大全』（精華書院、一九〇七）に所収されているが、翻字の誤りを修正し、節付も補い、改めて底本に忠実な翻刻本文を提供できるようにしたことを断っておきたい。

潤色江戸紫

作者為永太郎兵衛　翻刻の会

序いせ物語よみくせ
むかし。娘ありけり。思はざる難にあひ。東の都の。町の住居をはなれ。菩提所にかりに居にけり。其寺にいとなまめいたる。小姓の有けるを。かいま見て心地まどひしより。逸早みやびをなんしける。色香も深き恋草のヨロシヘ浮名ぞ世々の。形見なる。比は天和の始の年。二月下の五日。天満宮の御末流。都五松宰相（1オ）殿の御本所には。けふ御神事とて賑しく。未明より北野の聖廟へ御社参あれば。北の御ン方お手廻りの。女中を相手に琴を弾じ。吹物の声澄渡り管弦も。既に事終れば。思ひ〳〵に詩をつくり。和歌を手向の神いさめ。有難くも又なまめかし。折ふし次より。取次のあないにつれ。お家の雑掌。安森源次兵衛が妻の名代とて。三十余りにいやしげなき。女房盛の片かうがい。袍姿しとやかに。臆する色も長書院。御目通りに手をつかへ。憚りながら。私は（1ウ）きそと申て。源次兵衛が躬吉三郎がうば。主人が妻は長々の病気ゆへ。名代の御機嫌窺ひ。いつ〳〵の廿五日より取分ケて日和もよく。お目出たい御祭礼。御前ン様にも嘸御満足でござりませふと。入ル事計さつはりと詞少に述けるは。吉三郎を育たる。うばが器量ぞ奥床し。北の御方御機嫌殊に艶しく。兼て源次兵衛の妻の願ひには。四十二の二つ子なれは。出家させんと幼少より。東へ遣し置ィたる。一子吉三郎を呼戻し。家をつがせ度との願ィゆへ。我ヵ夫マ宰相殿。則今日北野の神前において。源次兵衛へ直キに其旨仰（2オ）付らるゝ筈。それに付是成ル女童は雛鶴とて。幼時より手廻りにて使ィし者。吉三郎に娶よと我ヵ殿のおさしづと。世に頼もしき御ン仰。ハツア冥加に余る御ン計ひ。私が育た和子の身の出世と。うばが嬉しさ。雛鶴もおもはゆげに。ホンニまあ数ならぬ便リない此身を。稚ひ時より御養育。それさへ有ルに誰有ふ。源次兵衛様の嫁と成

は。かさね〳〵の御厚恩と悦ぶ事は限なし。北のかた重て。雛鶴といふ名を。今よりお雛と改て。吉三郎に云号するからは。何かはきそが世話ならん。よきに頼ムと有けれは。ア、何が扨君より給はる花嫁御。おひな様の身の上は此うばに。（2ウ）お任せなされて下さりませ。立帰つて此よし申さは病人も嘸悦び。長居は恐レとお乳の人。御前ンを立ていそ〳〵とやかたにへこそは帰りける。

時しも北野の社より。主人に先達チ下向する。五松家の両家老。安森源次兵衛稲垣平太。社参の礼服おごそかに。御前ン間近く畏る。北のかた見やり給ひ。両人が先だつての下向気づかはし。我カ夫マのお帰りは。何ゆへ遅きと尋給へは。源二兵衛。謹で。イヤ我君には。神事の義式相済ムと。直ク に参内遊したるによつて我々御ン先キへ。罷り帰る其子細は。是成平太に急の御用仰付られ。今日俄に江戸表へ出立。ヲ、、其義は兼（3オ）て我カ夫マのお願ひ。江戸湯島天神の宝物。松竹梅の一軸は。当家の御先祖。菅丞相の御ン筆なれは。拝見なされ度キと有て。五条高辻五松。東坊条唐橋と。其家々は分カれ共。皆菅原の御家門。一統しての奏聞にて。今日勅許有けるか。ハ、いかにも。此平太に彼ノ松竹梅の一軸を。受取参れとの仰。殊に彼地は源次兵衛の故郷。吉祥院と申ス。菩提所に罷り有ル吉三郎を。よき序なれは召連レ帰れとのおさしづ。源次兵衛は跡より発足。致さるゝ筈也と申上れは。ヲ、、御先祖天満宮の縁日にあたつて。御家門のお願ひ勅許有し折から。源次兵衛（3ウ）の願ひも叶へは嘸悦び。扨又是成ル雛鶴を。吉三郎に娶よとの仰なれは。伴ふて東に下りや。彼ノ地には戸倉十内とて。吉三郎が母方のおぢも有と聞ク。直に婚礼取結ばゝ。媒は稲垣平太。其旨とくと心得よと。重き仰にハ、ア冥加至極と源次兵衛。頭を畳に摺付れは。

産付イたる平太が苦口。拙者は公用なれは先キへ出立仕る。源次兵衛殿は内用の事なれは。勝手次第に立召れ。七八ケ年も寺に育た。吉三郎が清進腹へ。雛鶴の生鳥をみやげに遣さるゝとは。何から何迄お気の付イたお上ミのおさしづ。併いまた妻をもぐせざる此平太。媒してもくるしかる（4オ）まいかな。ハテ何が扨。其義はちつ共御遠慮ない事と。互イの挨拶雛鶴も会釈して。吉三様は聞及ふ御器量よし。見ぬ恋にあこがれし望ミは叶ふて嬉しけれど。御所に育たといふは名計リで不調法な私。ホ、其案じは道理〳〵。媒の拙者なれば。とくと聞たいはこなたの親本ト。此お家へお出入の。呉服所の娘よなと。問れて雛は顔赤らめ。返事なけれは北のかた。ヲ、今迄は深く包しが。あの雛には父もなく母もなく。十六年以前歳末の御神事に。宰相殿北野詣の帰るさ。七本松の辺に。赤子の泣ク声せしを。乗物のみすの隙より見給へは。早咲の梅を。一ト本（4ウ）添たる女の捨子。誠や当家の御先祖菅丞相には。父母もましまさず。是善公の庭前の梅の本トに。天降給ふと聞。其古例を学び。五松家へひらはれんと。梅の枝を添置し親の心のかんばしく。仕丁共に云付て連帰り。両家老のそち達にも隠し。密に出入の呉服所を頼み。八つの年迄育させ。末の栄を寿て。雛鶴と名を付自が手廻りへ召出し。娘も同前に養育せし者なれは。不便ンをくはへてやつてたもと。世に有難き御ン物語。ハ、ア遖成ル嫁が系図。源次兵衛が身の満足。そふ共〳〵。媒いたす。拙者も倶に大慶と詞を揃へ。お受申せは北のかた。平太は急ぎ東マへ（5オ）くだり。湯島の社の宝物。松竹梅の一軸を。首尾よく受取帰洛すべし。逗留の間は小石川の。円乗寺に旅宿せよ。阿闍梨は自が弟なれは。心置キなく頼べし。先々源次兵衛は雛を屋形へつれ帰れと。残る方なき御ン恵おそれ敬ひ退出する。

地色中
老をいたはる花嫁の姿はやさし姫小松。つれて東へ飛梅や。いろかをふくむ梅ばちの。御門を出る。旅の空長閑き。春こそ〳〵久しけれ。三重

地ハル
花のお江戸に隠レなき。太田持資の草創有し湯島の社年ふりて。数の願ひを神楽所に立まふ。神子は当社の神職。柾采女が秘蔵娘。顔も姿もうつきりと名さへ小雪が恋ざかり。年は十八さゝげし鈴に（5ウ）神和らぎ。参詣よだれを車つかひや競組。其鈴爰へもかしこへも戴たがる悪ク色たい口。ヲツトみこ殿跡が有ルと。お初穂ほふれば。次はおふくが入替り鈴戴て舞けれは。おふくはいやじや初の神子殿御供を爰へ。アイと小雪がさし出すを我レよ人よとばい取勝。あたま勝なる若者共鳥居のかたへざゞめき行。コレ小雪様ン。せんど戸倉十内様のお出の時。おまへの色の三吉殿がお供してごんしてアノ松竹梅の絵馬を見て。本郷お七十一歳是をかく。扨も見事。手が美しけりや器量が思ひやらるゝといふてで有た。あんな悪性な男共しらいで。お洗米つゝむ杉原で日文かいてやらんしても。あつちには気がおほいとたき付られて。マアそ（6オ）りやほんかいのとうろ〳〵すれは。サアそれじや程に。都から下つてござんす稲垣平太様。おまへにほれて日外より。色々とくどかんすこそ幸。某女房にならしやんせ。ヲゝうるさいそんな事は聞キたふない。とゝ様ンの碁の友達の内でも。中カのよい十内様。お供はいつでも三吉殿。ござる度にそふじやぞへ。かふじやぞへと念入レて置クのに油断のならぬ。見へたらどうしてかうしてとりんきの稽古折こそあれ。地色ハル
入来る戸倉十内。りつぱに物すく当世侍。供はりゝしき角前髪。

地ハル色
小雪嬉しく。アレ十内様がお出なされた。とゝ様へ申てたもと二人を立せ。舞衣取て出向ひ。まあこなたへとあいくろし。

ヲ、今日は京都五松宰相殿のお使者。（6ウ）稲垣平太と申仁。御用筋で来らるゝ筈。其義に付ィて身も参つた。定て平太わせられたで有ふな。アイお出なされてまあ有ふ事か。聞ヵしやつて下さりませ。私を女房にくれいと。此間より爺様に色々と貰かけ。あたいやらしい事の有条。又其上へ腹の立事聞て。ヱ、けふは又なぜ遅ひと。待た程に〳〵三吉殿。ア、是々。そりや何いはつしやる。お旦那のお出は御用筋。サアそりやしつて居る。逢ヲたら心一ぱいいはふと思ふた。じたいマア〳〵〳〵こな様ンが。コレハ〳〵やれきつい腹立。ナニ三吉。身に成かはつて。彼ノ心一盃いひたい事を聞てとらせ。小雪も咄せさ。イヤ平太采女が嘸待かね。罷通ると家来引連レ入にける。（7オ）さつてもしたり。十内様は睟の水上。いたづらの水上とは是爰な性悪様ン。又沙汰なしにいぬまいぞとじつとしめたる手の中ヂに。猶余り有ル恋路也。コレ〳〵旦那は睟なれど。かたくろしい御親父采女殿が。見付られたらやかましい。イ、ヱと、様ンは此事をよふ知ッて。末々はおまへとわしを。女夫にせふと思ふて居さしやんす最中へ。あの京の平太づらが横恋慕。たとへ死ナしやんしたか、様ンの蘇てすゝめさんしても。それはいやといひはつて済マさふが。心の済ぬはこな様ンの胸の内。あの松竹梅の絵馬を見て。手が美しけりや器量もさぞと。あんまり誉て貰ふまい。いやじやぞへ。おかんせと。むなぐら取てもそしらぬ顔。此（7ウ）手がまめで油断がならぬとほつかりかまれて。アイタ、、。こりや迷惑。いふ事が有なら噛ず共。呑込様にいふたがよい。手を誉たを恪気せふなら。此中両国橋で。占算がおれが手の筋を見て。ア、よいお手じや。しかし神子を女房に持ッたらば。ヱ、其跡は何ンといふたへ。サア其跡は。女夫中睦じかるべし。そりやほんかへ。ヲ、嬉しとひつたり抱付ク相思ひ。人目をとぢよ恋風に乙女の姿しどけなく。

地色中
コレ三吉様ンまだいひたい事もたんと有。あの神楽所へついちよつと。いや〳〵も岩木ならねは打とくる。神や首尾し
て逢すらん。地色ウ 折もこそあれ本郷四丁目八百屋久兵衛。何か白木の掛物箱たづさへて入来る。（8オ）娘お七は門前より駕籠
を折しる。わかな染。だて紋は封文。長地 風流娘と名に立テて江戸紫の色ふかし。コレお七。足が痛ならデヱちともんでや
ろか。ヲ、勿体ない。と、様ンとした事が。かごに乗てきたによつて。わたしは足はいたふないが。お前は嘸お草臥。イヤ
なふおらは上元の生れ達者にござる。アレ見や久しう参らぬ内。神楽堂が建たは。江戸中の絵書が我レ一と上ケた絵馬。此
祇園の火灯は法橋吉庵。鐘馗大臣は狩野養卜。長谷川当春が朝比奈の草摺引。ひいき目かしらぬがわごりよのかいた松
竹梅。天神様の真筆を。手本にした程有て。見事〳〵。イヱ其時は天神様のおかげて。（8ウ）ほんのあれはてんねん事。
今はけつく手がふるふて。イヤ〳〵それから五つ年がいた物。上るとて下りやせぬ。ヤア娘じまんにかゝつてほつとりと
忘レた。此御神筆采女殿に手渡しする迄は気がせく。サアわたしも早ふいにたふござんす。コレハしたり。日頃信心する天
神様も拝ずにもふいにたいか。其様にお寺に居心がよふて。尼に共成てくれな。アレ筑紫の飛梅を継穂にした。御神木の
花盛リ。さあおじやいかふと寸ンの間も。傍をはなれぬ子かはひがり連レてへ本社に詣ける。
歌 長い頭巾はよおいよやさ。競立衆のよおいよやさしるしでござる。ハウヱツプ。後の一盃が過キたなふ太左衛門。ホンニ
武兵衛大分ン酒がある（9オ）がつた。あの鉢も大坂の浮瀬にまけやせまい。イヤ。今ちらりと見たは。貴様の舅八百屋の
久兵。かごからおりたは慥娘のお七。ありやいつ女房に持ッぞい。銭金入レながらお頭きつふ釣れるの。サレバイヤイ。小
判でつらはつて置ッのに何ンのかのといひ延す久兵衛。見付たが幸じや。ほてのくねる程たで付てこまさふ。ソレ〳〵本腰

に成てもくわれと。大道一ぱいすじかいにのけぞりかへるぞにくてい也。イヤ太左衛門。あり様マは甲州屋へいて。ぶつかけでもかき込ンで待ていや。ヲ、そんならそふせふ。用が有ならちよつとしらしや。皆の者どら連レてこふ。何ンのいやい仰山さふに。サア（9ウ）いけ〳〵と太左をいなせて待所へ。

久兵衛親子を送ッて出る禰宜与太夫小腰をかゞめ。おまへ方お出の様子見受ましたれ共。主人采女只今拠なき客来。コレハ〳〵御ていねいなお断リ。扨手前へ預リ置キました御神筆。松竹梅の一軸を持て参つて。神楽所に待ッて居ると。おつしやつて下されと。云付かへす後より。コヲレ〳〵。鼻の先キに居る花聟になぜ挨拶さつしやれぬ。ホイ万屋の武兵衛殿天神参リか。ア、。皆の者ンどらがぶつかけ喰に行ク。こんかといふたによつて。コレ〳〵お七。めんようあの子はおれ見るとあちらむくはい。胸わるくと聞てもらを。先ッ此武兵衛近年の出来分限。競組へも金かして（10オ）お頭〳〵と用られ。去年日陰町の類火の時分ンも。こな様ンの所へ皆の者どらかけ付さして。荷物を旦那寺の吉祥院へのけさしたも。皆此鼻が金の威光じやノよいか。おうといはれ。それから振廻しがめてに見へるによつて。まあ是で家と蔵とを建さつしやれと。利銀なしに三百両渡して。もふ近い内本郷へ家移も成ルは。かふ肩入レて世話するに。何が不足で嫁入は遅ひの。イヤおりや筋がわるいかいなあ。是比黒ひ目でにらんて居る。八百屋お七はお寺の小梅すいもあまいも喰た。小姓がしるといふ歌がはやる。ア、是申。爰はでんど人も聞ク。わたしが嫁入は新宅へ（10ウ）家移もしてから。ヤ家移リもしてからべ、、、、。美しい顔であんまり積てくれな。サア久兵衛殿。かした金とろとはいはぬ。お七を今つれていぬ。イヤまあ得心させて。金の訳も立た上で。ハテこつちへくるからは金の事はいはぬ。連レていぬるといやがるお七を無体。さゝゆる

久兵衛つきのけはりのけ腕まくりしてせちがへは。後ロに始終を立聞ク三吉。こらへ兼て武兵衛が首筋引掴でどうど投。小雪諸共親子をいたはる其内に起上つて。コリヤ前髪め。どつから出さつてよふ尻餅をつかせたな。ヲヽサ。旦那の屋敷へお出入の八百屋久兵衛。何かはしらず難義の体見捨がたく。挨拶に出たが何ンとした。ムウ。今の様に投ケ（11オ）たのが挨拶か。イヤ手前は投ぬけがで有た。まあいはゞお身がよはいといふ物。イヤこいつが〳〵。うぬを投ケてけがで有たと済マすぞよ。コレ〳〵麁相いはしやんすな。代官所のお役人。十内様の御家来じやぞへ。ヲツト神子殿肩持しやんな。虱と侍ィこはがつては競組と口はきかれぬ。投ケた返報まつかうと腕振上れは。われぶつかよ。小指の先キでもさはるが最期。其場はたゝせぬ。さあぶて〳〵。イヤぶたぬか。ソレ其腕は何ンの為じや。イヤ是は彼ノ舅殿八百屋殿。是ほんな自然薯はなんぼしよな。ホウても替つた物望じやの。イヤ望は其お娘。コリヤ頬見知ッたぞ前髪殿様。其内逢ィましよおさらばと。まけぬ顔して立帰る。

久兵衛ははがみをなし。（11ウ）かへす金のあてもあれど。知る通りの不仕合。心に任せずいひたい事得いはぬも娘が不便さ。何レもの手前面目ないとはら〳〵涙。お七は悲しくわたしゆへに御苦労かける。冥加の程が恐しいと。歎けは小雪三吉も。心をさつしいたはる所へ。

当社の神職柾采女ゆう〳〵と立出。コレハ〳〵久兵衛殿。早速のお出祝着に存ます。ハア。あれへ呼はなされいで。扨彼ノ仰越れた御神筆持て参つた。ソレハ御苦労。京都五松殿御拝見なされたき使者として。稲垣平太と申仁先頃より逗留。社僧の喜見院へも隠して。六年以前に其元へお預け申た様子。せんかたなくて打明ケたれば。遉は京家の武士有ルまい事で

ない。其金子取替てくれふと（12オ）の事。ハア。それは平太様とやら御奇特な事。其金も直ゞに御寄進といひたけれど。しらつしやる通り類火のあげく。ヤそれはそふよ。扨爰に一つの気毒は。此箱の鍵が日外から見へませぬ。ナンノ〳〵。つい錠前は明キまする。イヤ御両所へ此通り。申上て下されと三吉を追やつて。枌を結でから手水。小柄で箱のふたこじ明ケ。ヤアこりや御神筆が中ヵにない。ドレほんに是は一軸の包ンで有た。雪の下といふ帕もなくて鈴の撞木が入レて有ル。ハア。はつと四人が顔見合せ忙て。詞なかりけり。

久兵衛心付キ。同宿部屋へ荷ひ込ンだい印の小長持。角の所がめげて有たは四五日以前。扨は其時盗れたかとかけ出せばア、是々久兵衛殿こりや（12ウ）どこへ。イヤ此中寺を欠落した。快典といふ。同宿めがしわざに極マりました。サア其同宿めが業にもせよ。逐電したれは詮義はならぬ。こりや皆采女が神より受る身の災難。ヤイ娘。おのりや勘当だ親でない。ヱ、わたしに何科有てイヤ科はない。恥をいはねば理が聞へぬ。六年以前お宮の修覆とは勿体なくも偽り。そちが九死一生の煩ひ。人参の価に手詰り。久兵衛殿に金の無心いふたりや。二言といはず用立ツて下さつた忝さ。子のかはいさは誰レしもと。お七の手習イすきやるによつて。是習て絵馬あぎやと。御神筆の巻物を預ケたは采女が誤り。久兵衛殿に科はない。おりや覚悟きはめて居る。勘当した（13オ）とて云訳はたゝね共。まのあたり災の元トは儕。親よ子よとは守奉る天満宮。御神慮の程が恐しい。出てうせいにも心が有ルと詞するどに云放す。久兵衛親子も取つ置イつ。云訳胸にとけかぬる小雪悲しさやるかたなし。かゝる折しも。三吉がしらせにて床几をかしこへ押直せば。稲垣平太戸倉十内。両人床几に腰打かけ。身が主人五松殿御先祖の奉納なれば。天神の真筆。口手間いらずに渡さるゝで有ふと存の外ヵ。八百屋久兵衛と

やらに預ヶたとな。其者代官所へ召よせ。御威光をかつて受取も存たれ共。それは情しらぬといふ者。則金子は何程でも。平太懐中致ィておる取替てくれふ。是といふ（13ウ）も恋は曲者。あの小雪を一ト目見て。陽成院の御製に恋ぞつもりて金と成ぬる。ハ、、、、。いざ受取リ申さふと。いへ共采女返答なく只はあ〳〵と平伏す。ムウ御尤。太切の御神筆。他見を憚召るゝならば十内遠慮いたさふか。ハツ痛入ルお詞。何を隠さふ御神筆が。ナニガ何ンと。サア。紛失致シた。ヤア〳〵そりやどふじや。ハアはつと平太大きに驚く面色。十内詞をしづめ。せく事はない大事の場だ。申披き承ふと落付ク程猶。張さく胸を押くつろげ。預ヶ置し八百屋久兵衛より請取ッて失ふたれば。此采女一人が誤リ。娘は子細有て勘当いたし置ィたればお構有ルまじ。云訳はまつかうと。脇指（14オ）に手をかくる平太声かけソレ小雪とめい。ハテ心のせまい老人。隠レなき御神筆。尋出すに手間はいらぬ。そりや十内殿のお役目気遣ヵはぬがよい。又小雪も勘当受たとな。案じるな。捨る親が有ても。ひらふ男が爰に居るな。合点か返事はどふじや。イヱわたしは云ィかはした人も有と。つい三吉と見かはす顔。平太尻目にかけながら。ヲ、〳〵神筆を受取ル迄は。何ケ月でも此江戸に逗留。其返事待もせふ。が。云ィかはした男と云は。ムウ〳〵聞へた。はれ御当地はしやれた事な。家来が不義ひろいでも。しらぬ顔きかぬ顔。いや丁稚めも勘定高い。山茶通ひをしやんこゝ〳〵で間に合すとは。お膝本の（14ウ）御倹約だなハ、、、、。上方武士のせぬ事と飽迄に耳こすり。

十内せきくる胸をしづめ。ヤイ三吉それへ出い。最前小雪が詞のはし〴〵。こいつ曲者恋慕の密事。見出して詮義せん為。わざと爰に残し置しに言語道断。ぶち放す奴なれ共。天神の廣前手討は赦す。召使ふ事罷リならぬ勘当だ。ヱ、すりや。私

めには御勘当。ヲ、畢竟妻なし夫トなし。いひ様で不義ではなけれど。先ッ不義さ。誠の不義とは。先約の有ル女に横れんぼ。是が不義非道の根元ハ、、、、。関東武士のせぬ事さ。こりやいはいでも世間が鏡。なふ采女。ハ、ア。硯の面に物かゝず。竹の楊枝も遣はざりしに。災難は却て幸イ。互ィに親なし（15オ）主なし気に入たどし添たがよい。ア、是も他人の事。構まいと余所目つかふて。涙くむ。

平太大きに気色を損じ。上のお帳面にもとまつた神筆。失つたは采女が誤リ。罪極ッた。それ縄ぶつて引立い。畏てかけよる下部ヤア暫ク。縄かけふかけまいは此十内が役目。事落去する迄は代官所へ同道いたす。大法なれは大小。はつと諾も涙さめ〳〵鮫鞘の。二ヲ腰をさし出せば。受取ッてヤイ三吉め。儕を草履取に召抱る時。末々は侍ィにと在所の親が願ひ。それも叶はぬ此しだら上り物に成た二ヲ腰。直ク こゝでお払ひなさると投ケ出せは。久兵衛走リ寄リ。入札するは町人の役。此二腰は私が買受ます。采女殿に成かはり。聟（15ウ）引出物嫁入リの世話するといふ。久兵衛めが詞に。空鞘はござりませぬと。聞に嬉しき采女が顔。平太は猶々。むつと顔。ヤア神主めを引立い。イサ十内殿。イヤ先ッおさきへと心を残して打つれ行親子の別れ舅 の別レと見送れば。言 たげに見かへれと急け〳〵と下部がつかうどぜひ泣々。しどろもどろにあゆみ行。

影見ゆる迄見送ッて。采女殿案しさつしやるな。お七といふ娘持ッて子の不便ンさ知ッて居る。気遣ィをせまいぞや。是はしたり。二人ながら泣ィて居る所でない。十内様のお 志 侍ィに成て舅殿の難義 救 しやれ。預つて失ふた御神筆。取隠しておかぬおれが身の云訳に。小雪はこつちへ連レていぬ。草でかけば。柾の（16オ）木篇に。久兵衛の久の字を合せ枚と名

をかへ。世間もあれは下女分ン。祝言の盃は追ての事。聟引出物受とられよと。両腰渡せは押戴き。お礼詞につくしがたし。主人の情舅への孝。此所の名の苗字として。拙者けふより湯島三吉と刀ぽつ込ムりゝしさは。侍ィ馴し身の取廻し。迚の事に御神筆の。表具の仕立御存あらば。ヲゝいふ迄もなし。娘が書ィたるあの。松竹梅の絵馬がよい目覚。アイとゝ様のおつしやる通り去ながら。昔の墨と今の墨。其色艶はかはれ共常磐の色にかはりなき。松といふ字の筆勢能。竹は直ク なる筆立の。梅といふ字にお心をと。おもはゆげに袖覆へは。

三吉はつとかんじ入。是天神の御ン引合セ。（16ウ）立願ンこめて身は跡より。コレ〳〵お杉。久兵衛殿親子の供して早く〳〵と気をせけば。アイ〳〵目立ぬ様に裏門から。さあこなたへと打連行。下女も振袖お主も振袖ふり合せたる。他生の縁ぞふしぎなる。

馬場先のかたより万ヅ屋武兵衛太左衛門。手下の悪者面々より棒引さげてかけ来り。あの前髪め最前の仕かへし。たゝめこぼてと追取巻ク。ホウしほらしき町人めら。咽筒に風穴の明ィたまかせ。とつぴやうじもない事まげ出すやつ。草履掴の時でさへ。尻餅を振舞た。今侍ィに成たれは。料理方は又格別と裙。引からげ。身繕ふ。イヤ其ほうげたぶつかうせ。

かゝれ〳〵と打かくる。かいくゞつてより棒もぎ取なぎ立〳〵へ追まくり。（17オ）

取てかへす三吉をやり過して窺ひ寄。武兵衛と太左が両方より。コリヤさせぬはと腰がらみ。ヲゝ合点と左右をのべ。首筋掴ンであたまとあたまくはつし〳〵。眼くらんで武兵衛は片息。がむしやの太左がしがみ付。かふ後抱にした所は。お七が絵馬の隣にある。吉庵が祇園の火灯。さし詰メおれが忠盛かい。ヲゝそふおつしやれは逢フた時。麦藁笠をぬいでの

勝負とふりほどけば。たぢろく足を踏しめ〳〵。掴ミかゝるを真のあてうんとのつけに。反かへる。
武兵衛見るより。マアそりやどうよく。兄貴一番ン待ッてもらをと。走リ寄て三吉が。帯を掴ンてどうど座す。ハ、、、、
正面ンにかけてある。草摺引の絵馬のうつしか。痩朝比奈の（17ウ）武兵衛殿。此三重廻りを引ちぎるか。其両腕を引ぬく
か。二つに一つ。力一ぱいお引なさい。コリヤ。〳〵〳〵扨ッても動ぬ。ナンノ動ふそこのけと。引たをして踏付る。
其間にうごめく太左衛門やう〳〵。起て力ラ足。しやうこりもなくかけよるを。同じ枕に踏付〳〵立たるは。鬼を踏敷其
勢ひ鍾馗の絵馬に異ならず。あれよ〳〵と悪党共声計リにて寄付カず。群る中へ二人が首筋引掴ンて投付れば。脚腰たゝず
ぱんやのごとく。ほう〳〵打つれ逃て行ク。
ヲヽ実尤。人に踏れて恥共思はぬどろぼの常。長追無用と襟打合せ。乱れし鬢を。かき繕ひ。早御暇と　賽　の三拝九拝。
天満宮の御利生にて。御神筆の一軸をたづね（18オ）もとめて永代の常燈明。御神前に掛奉らん。意願成就皆令満足な
さしめ給へ。願主。すなはち湯島三吉うやまつて申と祈願を。こめてたちかゑる

二之巻

武蔵野と詠ぜられしに引かへて。人の家居のつぎ〳〵敷。其諸支配を司どる戸倉十内が一ト構。珍客の御入と居間の小
庭の夏草を。髭ぬく様に奴が掃除。立派を好ム主人のかたぎ顕せり。江戸に名におふ器量よし吉祥院の小姓吉三郎。
情盛の角前髪二タ筋がけの髻に。露うく計リびんの艶。銀覆輪の対の鍔（18ウ）のつし熨斗目の茶宇の下モ。切戸口に下
人を残し入来り。ホウ鉄平久しう逢ぬな。おぢ十内様は御在宿か。ナアイ。今日お旦那は非番。京都五松の雑掌稲垣平太

様。けさ程よりお出なされてござる。おまへ様の越シの様子お上へ申上ませふ。イヤ取次には及ぬ。十内是にと奥より立出。ヤア吉三お上人よりのお使ィか。イヱ今朝父源次兵衛殿の旅宿。千住の貸座敷より呼に参り。只今が帰りがけ。ムヽ扨は千住よりの帰りに立寄たか。其方も存のごとく。湯島の宝物紛失せしゆへ。今詮議最中。其外何かと御用しげき故。いまだ源次兵衛殿の旅宿へさへ行ねば。此間はお寺へもお見舞申さぬ。上人は御堅（19オ）勝にお入なさるか。ハア仰の通り寺中相替る儀もなし。ヲヽそれは重畳。源次兵衛殿其方がうば。今一人お雛とやらん女を同道にて一昨日当着。手前が屋敷へ落付キ召れと申遣したれ共。千住は源次兵衛出生の古郷なれば。こりや早かふも有べき事。そちが為には母。我カ為には姉人。当春死去の砌リ何角の御遺言有たげな。委細に聞て帰りしかと。とへは吉三涙をおさへ。親人やうばが咄を承り。母様に別れし事。今更の様に存られて。悲しき中に親仁様。京都より御同道なされし。雛と申女を私が妻女とし。安森の家相続せよと。お上の仰付られとおつしやれど。母の菩提に出家いたしたき（19ウ）身の願ひ。直キに親人に申もいかゞとさしひかへ。お前をお頼申さん為。立寄ましてござります。ヲヽ出家ののぞみ殊勝には思へ共。御主人の仰を背ず。雛と夫婦に成家を立るは孝の道。イヤ私は元ト四十二の二つ子にて。育れは親にたゝるゆへ。出家させんと。吉祥院へ預ケおかれしは母人のはからひ。サレハサ。先年源次兵衛殿大煩の砌リより。寺へ預ケおかれたれ共。世継の男子なければ。髪おろさすは遅からぬ事と思ひ。身が計ひにて去冬半元服させたるは。か様の時の為さ。サアしかれ共。一ト度仏の霊前にて。妙典も授り候へは。此義はぜひ共。叔父者人のお取成シにて。ムウ去年角を入レさする（20オ）時は辞退もせず。今更剃髪の望ミとは。よめた。扨は御主人より給はりし。嫁のお雛と夫婦に成ル事を嫌ふてのぬけ〳〵じやなと。見すかすおぢの一

言ッに。きちとつまりし吉三郎。ア、全くお雛を。イヤ嫌ぬ物がなぜ俄に出家を望む。既に身が家来の三吉めが能手本。平日実貞な奴だと思ひしに。湯島の神主采女が娘。小雪と不義したるゆへ勘当した。聞ケは八百屋久兵衛。若い娘をつれてお寺に有ルよし。むさと詞もかはさぬ様にしろ。こりやはや。自分に堅く身をもては気づかいなしと。胸にこたゆる詞のうら。出家せふとは恋の嘘うはべに見へておぼこ也。

奥より平太出来り。ヤア十内（20ウ）殿。吉三郎が発心せふとは合点参らぬ。ヱ、イ。そふおつしやる其元様は。ヲ、お身が親源次兵衛の相役稲垣平太。御主人の仰を受ケてお雛を媒する身共なれば。聞捨に成がたく是へ出た。ハツ。扨はおまへが稲垣殿。私が出家致すと申は。ハテおいやるな。坊主にやならぬ。嘘々。シテ偽りとおつしやるには。ヲ、慥な證拠を聞ィた。八百屋久兵衛が娘。お七と堅くいひかはして。申々それは。ナント。よく知ッて居よふが。生若い口からおぢ貴をばかにせず共。お七が事思ひ切リ。お雛と夫婦に成ッたがよかろふ。媒の此平太は。湯島の宝物松竹梅の一軸。詮義が済次第に上京する。それ迄に早く祝言し召れ。悪かれと（21オ）思ふていふじやないナフ十内殿。左様〳〵。平太殿の仰も其方が為思召ての事。しかし。お七とやらんに訳有事。覚なくはないといへ。イヤ是々十内殿慥な事さ。吉祥院の同宿。則チ吉三傍輩に承つた。ムウ手前の同宿にお聞キなされしとな。クドイ。常念坊は先ッ月上旬より身延参り。連才坊は百日余りの病気。弁長はまだ幼少。扨は欠落いたした快典にお聞なされたかと。問れてはつと口どまくれ。イ、ヤ快典には聞ぬ。ハテお隠しなされな。快典に左程入魂なれは。其元様に詮義が有ル。イヤこいつ慮外千万と反打かくれば。ア、御短慮也先ッ暫く。吉三さがれ。ハツ。下ヵれ。ハツ。ひかへいといはゞひかよふ。湯島の宝物（21ウ）吉祥院にて紛失の砌リ。

逐電したる快典は今お尋者。そやつに平太殿がお近付とあれば。此場が何とやら。ナア稲垣殿。左様でござるまいか。若輩者の申ス事必お心に。何が扨。よしない事にかゝつて退屈致イた。御酒一献たべませふか。成程〳〵いざ奥へ。吉三郎は罷リ帰れ。ハツ。平太様。吉三。其内対面。さらば。おさらばと。立出る内庭づたひ。平太も遉底きみ悪ルく。心を残す尻目づかひ。ひらりと打たる小柄の手利剣。中カに隔る十内がたばこ盆にてはつしと受。コハ思ひがけなや稲垣殿。たつた今挨拶致イた拙者が詞を反古にして。小柄を手利剣に吉三郎を何ンとなさるゝ。イヤサそれは。モゝ物でござる。媒の拙者なれば。其小（22オ）柄を吉三郎へ引出物にせふと存て。ホウ然らは十内取次致さふ。表に銀の三疋獅子。裏には金ンの横鏟。持て帰れと。渡せは吉三は押戴き。此場を遁るゝ首尾上々吉祥。院へとへ立帰る。

御仏の妙なる法の菩提所や。吉祥院と聞へしは人の敬ひおも〳〵しく。尊き寺を仮住居。お七と杉が方丈に取ちらした る針仕事。互イに思ひより糸の。裙つじ揃ふ主従の中睦じく差寄て。ナフお杉。わしはけさから此いたいけな豆巾着に。べら〳〵とかゝつて居るに。其むつかしい仕立物。もふしやんと出来たそふな。どれ引合そかへ。アイそんならお頼申ませふ。わたしもついにこんな合羽は仕立た事なけれ（22ウ）共。三吉殿が旅立の用意。間に合の一丁三所。アレ又嘘ばつかり。是程立派に出来た物をと。合羽を手ン々にたゝみ付ケ。イヤなふお杉。今迄はこなたにさへ隠していたが。わしが下着を見て下されと。上の一ト重を脱かくれは。もへ立ツ色の緋縮面。乱レ薄に吉の字と三の字を。江戸紫の縫模様。テモ扨も見事〳〵。いつの間にやらこんな下着拵て。よふ今迄隠してござんした。そして手のよい事はいの。誰かいたへ。サア吉三様にかいて貰て。縫イにして着て居る心は。一寸ンも傍を離ず。離スまいといふ互イのたのしみ。是程に思ふ中も。本郷の

家普請ができたとて。かゝ様ンは悦ンでけさとうからいなしやんす。とゝ様ンもわしもけふ中にいんだら。吉三様に（23オ）逢ヲ事が成ルまいと思へは。身を切ル程悲しい。ヲゝそりやお道理。折悪ふ吉三様は爺御が京からお下リとて。千住の貸座敷から呼ヒにこずばい。互ィにいひたい事も有ル物。早ふ戻らしやんせいでと。見やる表に。忍ぶ姿の深編笠杉は立寄。ヤア三吉様ンか。下心の悪ルいいつの間にござんした。ホゝさつきにから様子は聞た。仮令おれなりやこそ大事なけれ。お七殿の下着の模様。外の者が見付ケたら。ムゝ為にならぬといふ事かへ。かたくろしい何ンじやの。こな様ンやわしも。互ィに心中様々の事した身なれど。恋こがれた程あいたとやら。日外からろく〳〵に逢ィにも見へず。適〳〵用があれはつまんだ様にいふていなんす。コレ合羽も仕立て置ィたが。旅立（23ウ）が誠じややら。但し外に面白ィ事が出来たも知レまい。ハレやくたいもない。三吉がさいて居る此鮫鞘の大小は。そなたの父采女殿の譲。刀にかけて見捨まいといひかはした。武士の詞に違ィはない。お七上郎の手前も有ル。ごくにもたゝぬ悋気仕やんな。イヤわしに遠慮はない程に。あの数寄屋へ連レ立ていて。とつくりとお杉の合点の行ク様に。アゝいや左様にゆつくりとした隙はない。今日此お寺へ来りしも。松竹梅の一巻紛失の節。欠落した快典が国所を聞合せ。いづく迄も詮義に行ふ為。旅立といふは此訳と。いへはお杉が疑ィはれ。アゝそれ程にわしがとゝ様の難義を救ふと思ひ。心をつくして下さんすかと。涙ぐめはお七がきてん。ヤアあれ〳〵。本堂から（24オ）誰レやらくる。此間にちやつと数寄屋へと。押やらるゝをしほにして。二人は打つれ入にける。新発知の弁長が。常香もりさし出来り。ハゝゝゝ見たぞ〳〵ヲゝおかし。杉と三吉が数寄屋へぐす〳〵。ありやこそはいつたヲゝおかし。アゝ是々。なんぼ年がゆかいでも。出家共有ふ者が。そんな悪口いはぬ物。コレこな様ンのやうなかは

いらしい。物いはぬ坊ン様ンにやらふと思ふて。美しい豆巾着縫て置ィた。ドレ〳〵。ほんによいのじや下され〳〵。サア是をやる程に。さつきに拾しやつた。わしが起請を戻して下され。ヲ、其巾着とかへ〳〵すりや。こちや大きな徳じや物と。懐より取出し。右と左リに引かゆる。拍子に巾着引たくり。飛ッがごとくに翔行。コレなふそれは横着なと。（24ウ）追かけ出んとせし所へ立帰る吉三郎。ヤアよい所へ戻つて下さんした。待兼ていたはいなと。すがり付ケはヲ、道理〳〵。本郷の普請出来とて。お袋は先キだつて帰らしやる。ぜひけふ中に親久兵衛殿と連立。サアわしや本郷へいぬるのが悲しさに。胸をいためて居るはいなと。打しほるれは。ア、いや其難義より。此吉三が身の上にも。降てわいた難義が出来た。ヱ、。そりやまあひよんな。ちやつと訳を聞してくだんせ。サレハけふ父源次兵衛殿の旅宿より。呼とに越れし其訳は。此度家督相続の願ひ叶ひ。御主人の北の方のお差図にて。お手廻りの妼雛といふ女を。此吉三が妻に下しおかれ。父が相役稲垣平太が媒にて。則チ千（25オ）住の貸座敷に彼ノ女。我ガうば諸共。迎の為下られしといふに恂りヱ、イ。そんならおまへは。其お雛様とやらを女房に持ッ気かへ。ハテ扨早合点な。それがいやさに今帰りがけ。おぢ十内殿の所へ立寄リ。色々と辞退したれば。彼ノ媒の平太が居合セて。わがみとおれが云ィかはして居る事を。誰レに聞たやらおぢ者人の目の前で。術ない事の有条と。語れはお七も悲しさ増り。互ィの難義問とはれ。当惑涙にくれ居たる。折もこそあれ万屋武兵衛。弁長引連レくるやいな。二人が中へつゝ立て。にらみ付たる有様は。塒に遊ぶ番の雉子。鷲が見付ケしことくにて。わな〳〵ふるふ計也。ヤア比武兵衛がそれ程こはひか。久兵衛殿夫婦に貰（25ウ）て置ィたお七。よふそゝなかして疵付ケたな。イヤ是武兵衛殿。当推量な事いふて。跡で後悔さつしやるな。ヲ、胡乱な事はいはぬ。此

弁長に証拠に成ル物を。今門前ンで貰フて置ィたれどめつたにや出さぬ。久兵衛や上人の目の前で。手しぶい詮義見せ付ると。聞クより三吉出るにも出られず気をもめは。

杉がかけ出。コレそりや無体じや。あなた方にみだらな事のないは。わしがよふ知て居る。ヤア一ッ穴の狐め。腮たゝくな聞ク事ない。どろばうめらうせ上れと。二人を引立かけ入れは。コレなふ待てと杉がつゞけは弁長も。跡に引添ィ入にけり。

時しも表に下部が声。安森源次兵衛様御出也と告る内。駕籠かきすへさせ供廻り門前ンに残し置キ。（26オ）しづ〳〵通れは。日玄上人立出給ひナフ珍らしや源次兵衛殿。御内証お果なされし段。書中にて仰越サれしが御愁傷さつし入ル。ついては家督相続の為。吉三郎を連レ上られんとの義。主命といひ。彼レが出世の筋なれは愚僧も満足。サレハ。其義を最前も躬に申聞すれ共。何とやら不得心な返答。何ンぞ身分ンに差構な筋でもござるか。イヤ〳〵左様では有ルまい。愚僧がとくと申含ふ。ソレ〳〵弁長盃もてと。挨拶半の襖越。うせふ〳〵と武兵衛が声。吉三お七を両手に掴ンで引立出れは。久兵衛杉もつゞいてかけ出。留るも聞カぬやら腹立。コレお寺様。此吉三めは密夫じや。女房を盗ンだはいの。うぬらをまあどうしてくりよ。アゝ是々。爰に吉三（26ウ）が親父もござる。麁相な事いひ召れな。イヤいひまする。堪忍ならぬ証拠は。是今爰で読程に。残らず耳を煤掃して聞てもらを。起請文之事。一ッ。其方様と夫婦の契約致シ候に付。御出家を止させ申ス上は。私もたとへ親々の気に背候共。縁付いたし申間敷候。是から奥は神おろし。よし様まいるお七より。ナント。是でも密夫でないか。サア舅殿。とふ成と此聟が立ッ様に。埒付ケて貰ィましよと。のつぴきさせぬ二人か身の上。胸に焼金さすごとく

とかふ詞もあら涙。きへも失たき風情也。

久兵衛たまらず。ヤイめろめ。いつの間に此様な。大膽な事よふ仕出したなあ。今度の普請に付。段々武兵衛殿の世話に（27オ）成たれは。腹立チは重々尤。おりやあの人へ一分ンがたゝぬはい。母はこんな事はしらず。本郷の新宅へ。家移を悦ンで今朝とふからいんだ。此しだら聞たら大ていの事じや有まい。不孝者め恥しらすめと。扇ふり上ヶ打たゝけは。上人しばしと押とゞめ。全彼レ等に不義はない。科人ンといふは此坊主。トハ又どうして。ホゝあのお七が。賤からぬ容義に。ふつと一念迷の心ンがおこつて。戯事をいひしを。稚心に誠と心得。其起請を認て送ふとかな思ふたを。取落した物で有ふ。イヤ是お寺様。此武兵衛をちよろこふ見て。ばかな挨拶なされても。起請の文字ははがされまい。サレバサ。今聞た文ン言に。其方様に御出家を。やめ（27ウ）さす上はと有ルじやないか。吉三は出家じやないはいの。殊に当名のよし様まいるは。吉祥院の吉の字。ムゝいか様こりや尤らしい。すりや慥カにこなたじやの。面白ィ〳〵。女房狂ひさつしやるなら。魚も鳥もしてやらりよ。幸ィ道の鳥屋で。見せ鶏卵の内たつた一つゑじめてきた。試にしんぜて見よふと。袂さがしてこつつりいはせ。盃に打込ンで。サアお寺様。うまそふな鶏卵酒。一つ参れと突付る。ヤア何ンじや。身共に是呑メか。ハレ疑ィの深い人。座興とは云ィながら。仮にも戯をいふたれは。邪婬戒は破れたれ共。殺生戒は得破るまい。へゝゝゝホゝゝ。そふ有ふと思つた。まつかいな嘘つぱちが。咽骨に覚有ルから。何ンとしていくまい〳〵。いやといやれば（28オ）吉三は不義者。目の前でしやつつらむくが。それでも呑メぬか坊ンさま。くらはれぬか梟頭殿。ムゝすりやぜひ共呑メじや迄。武兵衛。あんまりむごいぞや。いかに無体をいへはとて。一宇の寺を司どり。上人共いはるゝ身に。鶏卵

酒を呑マそふとは。身共が無間におつるなら。お手前は叫喚の。苦を受るのが不便ンなはい。といふて呑ずは聞れまい。愚人の目には鶏卵酒。我カ眼には清浄池。呑ンで疑念をはらさんと。ずつとほさんとし給ふを。三吉かけ出。盃取て投ケ付れは。

悔りして顔打ながめ。ヤイばりめ。うぬはいつやら湯島の天神でも狼藉。此武兵衛に出ッくはせは。邪魔ひろぐ。イヤ邪魔でない。誠お七が男といふは此三吉。イヤ（28ウ）様々の事をほざきおる。但しお七が男といふ。ヲヽ慥な証拠は其起請。名当のよし様は三吉の吉の字。ハアこいつ迄が同じ様に人まねひろぐな。其手はくはぬ。イヤサ此三吉が不義を隠して下されんと。吉三殿といひ。上人様迄お身にかへてのお情。有難ふは思へ共。此身の誤を押黙て。あなた方に難義かけふ様がない。サアお七。もふ隠されぬ。おれ任セにしておきやと。上着の肩を押ぬがせ。コレ見たか武兵衛。下着の模様に三の字と吉の字を。縫にしたは三吉。ナント是でも上人様に。鶏卵酒をしんぜるか。吉三殿を疑ふか。うろたへ者めとはりあいかけ。此場の難義を引ッくるめ。俄カ身にかぶる云披。お七吉三を始メとし。皆々かんずる計也。ムヽ扨は儕が誠（29オ）の密夫じやな。道理で日外湯島で。久兵衛親子が肩を持チ。よふひどいめにあはしたなア。段々の意趣かへしと掴かゝるを源次兵衛。がんづか取て打たおし。我カ躬吉三郎を。不義者となぜゆつた。サアそれは。サアお七が不義の相手は三吉。躬吉三郎になき名を付。武士たる者を密夫と能クぬかしたなあ。打放すやつなれど。血をあやするは寺院の穢。命チは助たうせおれと。つき飛されて二タ足三足。思へは無念と立寄ルきつさう。まだ義者ばるか。云分ン有ルか。けもない事。いやで候。こりてそろ〳〵いんだが勝と。跡をも見ずして逃帰る。

三吉しさつて手をつかへ。お久しや源次兵衛様。先年旦那のお供して上京の時。お目にかゝつた儘。此度当地へのお下りの（29ウ）様子も。ホウ定メて委細聞たで有ふ。不慮な事ゆへ其方。るらうの身と成ッたと聞キしが。シテ彼ノ松竹梅の一軸。いまだ詮義の手筋もなきか。サレハ。其手がゝりは則チ此お寺の同宿。快典と申者と聞クより上人。ヲ、其義は愚僧も心がゝり。逐電の後行衛しれねは。大方生れ古郷へ帰りしに極つた。シテ〳〵。快典が古郷はいづく。ヲ、信州高井郡荏原村。ハ、ア幸々。其荏原村は此三吉が古郷。案内勝手知ッたれは。さがし出して詮義せん。いふにや及ぶ。一刻も早くおいきやれ〳〵。畏ッたと裾はせ折。杉がさし出す歩合羽。取て打かけ耳に口。我レに代つてお二人リの。身の上に気を付よと。懇に云含暇申て立出る。

源次兵衛気色をたゞし。コリヤ吉三郎。爰へ（30オ）参れと膝元に呼よせ。骨桶取出し前にすへ置キ。ヤイ躬め。今三吉が難渋の場へ出合イ。無事におさめし働キをよい事と思ふか。密通の証拠に成た女が下着の文字割。三吉と読しを余人は誠と思はふが。我見る所は各別。文字は薄に一字づゝちらしの縫。三の字を頭に置キ。読下せは三吉なれ共。ひつくりかへせは吉三イヤ知ルまいと思ふか。儕が心に覚有ル不義徒を遁ん為。大恩深き上人の慈悲心より破戒して。鶏卵酒をまいるのを。よつくながめておつたなあ。それのみならず。三吉に悪名譲て悦ぶは。人非人といはふが八逆罪の科人ン。今手にかけて打て捨る。と此源次兵衛なれはいへ共。コリヤ。此骨は儕が母。な。其母がいふ（30ウ）のじやによつてそこは赦す。情なや其性根とはしらず。死ヌるいまはの際迄も。心にかゝるは吉三郎。四十二の二つ子故。出家させんと幼少より吉祥院へ遣し。手習イ学文精出すと。聞ケは嬉しき其中にも。ぐど〳〵思ふは女の習ひ。かけがへもなき一人リ子を遠き東へ放

やり。往来も自由ならぬ身の。案じつもりし此病ィ。漸〳〵此度。家相続の願ィ叶ふて。呼上す悦びはいか計リ。早発足もけふあすと成ッて。おもる病ィに医療も叶はず。此儘果るはよく〳〵うすき親子の縁ンと。思ひ廻せは猶なつかしい。願くは今生で。ま一度顔が見て死たいが。それも叶はぬめいどの道。亡跡の香花も吉三が手から受ケたいと。涙を流して（31オ）言舌の廻るたけ。儕が事ばつかり云置ィて死ンだはやい。心根の不便さ。遺言の有増は。最前旅宿でいひ聞した通り。此骨に成共対面させふと思ふて。持ッて下つたかいもなく。二タ親が目の前でつらはぢさらす徒者。斯と知ルなら此骨を。直ク に身延へ納たら。母はうかむで有ふ物。何ンの因果に持廻つて。此ざま見するは迷の種。香花は扨おき。親を奈落へ沈おる。不孝者め罪人めと。母に替りつ我レと我カ。詞を尽し理を尽し。或ィは怒。或ィは悲しむ目の中ヂにうかむ。涙ぞしんみなる。

吉三ははつと理にふくし。誤リました親仁様。赦て下され母人。此上は何事もお詞は背まじ。左程不便に思召す親の慈悲心ン冥加な（31ウ）や。責て一日半日も御存生に付添ず。替り果たるお姿と。骨桶取て載き〳〵。むせ入きへ入泣しづむ。ヤアそら〳〵しき後悔涙。まだ親をたばかるか。迚くさつた其性根で。我カ家督は継されず。主人への面晴。親でない。子でない。七生迄の勘当と。云捨て立んとす。上人おさへて先々待れよ。子に折檻の杖あつるも親の慈悲とはいひながら。勘当とは情なし。誤ッたといふに違ィも有まじ。去ながら此上の念に念。暫ク愚僧が預つて。とくと合点の行ク様に理かいをといて聞せなは。得心せぬ事有まじと。猶も慈愛の詞にハツト感心し。不所存者を左程迄重々厚き御ン恵。此上の御憐愍。宜ク頼奉る。私とてもお聞の通リ。（32オ）娘が武兵衛を嫌ふては。借受ました大まいの金。立ねはならぬ大難義。ど

ふぞ得心いたす様に。おすゝめなされて下さりませ。ヲヽ何が扨気遣ひ召るな。二人共に愚僧が預り。急度心を改メさせ。御両所へかへしませふ。ハヽア忝し。其お詞を聞からは最早安堵。幸イ身が家来共。門前ンに駕籠も待せ置ケは。後程おかへし下さるべし。いかにも〳〵。お七は此方より送らせませふ。ハヽア然らはお暇申ス。ヲヽ御両所共に帰らしやるかおさらはと。吉三お七を伴て。上人奥に入給へは。

跡中に二人リの親々が式礼目礼久兵衛は。杉引連レて本郷へ。源次兵衛は旅宿へと立別へれてそ帰りける。

既に其日も。入相の。鐘は常聞物なれと。心から（32ウ）とて。身にこたへ。胸にこたへて憂事の。重る数や五つ六つ。お七はしほ〳〵立出て。暫し涙にくれけるが。一途に思ひつき詰メし。用意の剃刀取出し自害と見へしを。コレ〳〵待た早まるまい。ヤア吉三様ンか。とめずと死ナして下さんせ。サア其死るといふ訳は。ハテ親々の手前をなだめ。預かると有ル上人様。定メて二人リを走ラすのか。但しは外によい思案が。有ての事かと思ひの外。やつぱり思ひ切レとの異見。まして武兵衛が当前の証拠にこまり。一旦得心していんだり共。肝心の起請が手にあれは。いつ迄も難義は遁ぬ。イヤそりやちつ共気遣ひない。起請は爰にと懐より取出せは。ヱヽイ。それはどうして。サア今奥で弁長か（33オ）いふは。最前のどさくさ紛レに。武兵衛が落していんだを。拾ふて置ィたとくれおつた。ドレ〳〵。ほんにこりやわしが起請。扨は小心にも。是で二人リが難義するを笑止に思ひ。拾ふてくれたはしほらしい。それが戻れは武兵衛が手前案じはない。さあどこへなと連てのいて。イヤそふは成まい。先ッ一旦ンン親達の心を休め其上では。イヤ〳〵〳〵そふいふて云号の。お雛様に添気じやの。ハテ訳もない其為の起請。おれが書ィたはそつちに有。是をこつちに持て居れは。互ィに心のかはらぬ証拠。遅かれとかれ

添ではないか。ヤア〳〵両人そりや何いふと。立出給ふ上人。二人が中に押直り。去リとは聞分ヶなき者共。今奥でいふ通り。吉三郎は（33ウ）お七が事を思ひ切リ。云号の女を婦妻にぐし。親の家督を継ざれは源二兵衛の武士かたゝぬ。そこを察して両親に受合たる愚僧。出家侍ィ義は替らぬ。ぜひそち達が得心せねは。傘一本ン寺ひらかふか。アゝ申勿体ない。幼少よりの御厚恩親にも勝る。おまへを退院させましては。ムゝ然らは聞入レて親元トへ立帰るか。成程違背は残ンませぬ。コレ吉三様。其筈じや有ルまいがの。コリヤ〳〵お七。そちとても吉三が事思ひ切ラずば。久兵衛に頼れた愚僧がたゝぬ。ヱゝ見限り果たる者共。無益の詞を尽して残念ン。我ガ住職も是迄と。云捨て立給へは。マゝ待て下さりませ。両人共に得心か。アイと互ィに顔見合せ。ぜひに及ぬ吉三様ン。お七。一度。（34オ）にわつと声を上泣しづ。むこそ道理なれ。倶に不便ンと上人も。目には涙を。持ながら。時刻移さは妨と。ソレ〳〵男共駕籠をもて。源次兵衛の御家来も。迎ィのかごを是へ〳〵との給へは。アゝ冥加ないおさしづと。いふも涙にしほれ声。二人は漸〳〵。庭におり。コレお七。かふ成ルからはおれが事をふつつりと思ひ切。親達の心に随ひ。随分ン共孝行尽しや。ハテそれは同じ事。おまへも親御の気に背ず。お雛様ンに添て下さんせと。互ィにうはべを取繕ふ心のくるしさ詞にくろめ。面々かごに乗移れは。ホウ両人共に聞分てくれて満足。始終にべなき愚僧が異見。嘸木の端の様に思はふが。素性法師や道因が。恋歌をよみし例も有。（34）そち達が切なる思ひを察しては有ながら。たとはゝ庭の。あの柳。緑の色の深けれど。散時あれはこそ人にも惜れ。又くる春に栄を見すまつ其ごとく。世上の義理と親々へ孝行の為と明らめ。一旦縁を切ルとてもながらへあらは品に寄リ。つながる時節も有べきぞ必よしなき心を持ッな。早とく〳〵との詞に随ひ。かご舁出せはいとゞ猶不便さ増る落涙に。衣の袂をしぼ

らるゝ。○地中ア、勿体なや上人様のいかい御苦労。忝イ共嬉しい共いつの世にかは忘ふぞ。コレ申吉三様ン。今のお詞聞てかへ。此上にまだどの様なせつない事が有ふ共。はやまつた事して下さんすな。△いやとよわしが身の上より。案じらるゝはこなたの事。短気な（35オ）心持タしやんな。□ヲゝふたり共によふ得心してくれた。随分無事で。二八おさらは。□さらは。地ハさらば〳〵入といふ声も次第〳〵に遠ざかる。道は二タ筋ひとすじに思ひ合たる比翼の中。引はなされし籠の鳥。泣ク々。△別れ。○上□帰りける

三之巻

地中東路も都に同し。よねの風。姿の花の色深く酔の紅葉に月の眉。雪の肌を打任せ情商ふ新吉原。頃日しこりの大々臣都のひらとそやされて。爰に浮名を揚屋町三浦屋の八重菊を。我カ物顔のしつぽり酒。

地ウ付添フ牽頭は万（35ウ）屋武兵衛油屋の太左衛門。ナント両人。京都五松殿の雑掌。稲垣平太共いはるゝ身が。恋なれはこそ此間より様々と口たれて。八重菊殿を根引の相談しかけても。都の客はお嫌ひやらついに一度の逢瀬さへ叶はぬ。哀レな事と思ふてくれと。膝を枕のとろ〳〵目。ハアいか様是はひら様のがお道理。爰は武兵衛が取持チませふ。菊様ンもあんまり張が強過る。ぜひに今宵は打とけ給へ。いやとはいはさぬかための盃。爰で一つと太左衛門も倶々に。すゝむる詞の先キ折て。コレお二人リ様ン。おまへ方迄がやほらしい。其挨拶置イてくだんせ。湯島の神主の娘にひら様が首だけほれて。其おかたの面ざしに。此八重菊がよふ似たといふて。根が当座のうはきじやによつていやで（36オ）ござんす。ヱゝイそんな事どいつがぬかしたと。地ハ恟りすれは禿の吉弥。爰に居さんす太左様ンのいふてゞ有ッたと。地ウさし出るを扇でぴつしやり。

商買が油屋なれば。すべつたは口の科。武兵衛丈。ひら様へお取成シお頼申す。おの字でいはゝ。おうといはぬが。恋路の手くだ。ソレジヤハ〳〵くぜつしかける下心恋じやへ。うたふなかばへ。亭主が調子も巽上り。申々。ひら大臣様に逢ふといふて。きのふきた願人坊主が門口に待て居ます。ヲヽ其筈〳〵。諸事は武兵しめし合せて置ィた通り。アヽ畏ッた。坊主に逢ッておりのりは。私が致シます皆々奥へとすゝめやり。

待間程なくつゝか〳〵。吉祥院の同宿快典。逐電の其後は住所定メぬ三界坊。コレハ〳〵。（36ウ）久しうあはぬ内に哀レな形になられたの。サア是はお師匠の目をくらました罰。こなさんや平太様に頼マれて。松竹梅の巻物。シイ。それをこは高にいふ事かいの。デモ盗ンでやつたに違ィはないはさ。それに褒美の金を下されぬ。ひらではなふてへら大臣。奥にござるなら此手紙渡してくだんせと。さし出せは武兵衛おつ取。ハレめつさうな。稲垣平太様快典よりと。互ィの本名顕してかく物か。けふはさし合ィなお連レがあれば。先ッ此手紙は持ッていにや。今迄二両や三両づゝ。平太様をせぶつてとりやつた算用詰は。此武兵衛かしておませふが。但し又うさんなか。ハテ何ンのいな。八百やの娘のお七にほれて。焼跡の普請してやる様な大腹中なこな様ン。違ィは有ルまいが。日の延る（37オ）のが迷惑。サア急にせいらくするはいの。けふはきり〳〵いんでたもと。せり立られて快典が。件の手紙を懐中し。どうぞ今ン夜の酒代程かしてくだんせ。ヱヽ宿なしに成ッたりや。けびた事をいふは。きつさりと一角はづまふ。ソリヤ忝ィと。扇に受て載き〳〵。是からなじみの柿暖簾。やす物かふて楽んととつかは急き立帰る。

始終を立聞ク稲垣平太。ヤア〳〵武兵衛。何かに付ケていかい世話。京都より下りふと此廓で出合ィ。一大事を明カして頼ミ

しも。其心底を見すへしゆへ。イヤ此世話致すも。おまへを頼ンで吉三とお七が縁を切ッて貰たさ。ヲ、其方とお七を夫婦にして。八百屋が下女に成て居る。小雪を身が手に入レたいと。のぼり詰メたる恋のかけはし。顔は上気に（37ウ）うす紅梅の。帕包を取出し。快典を語ひ。此松竹梅の一巻を盗取しは深き方便。是を越度に主人の家を断絶させ。年ン月たつて平太が尋出したと禁庭へさし上。身が出世する其時には。そちも太左衛門も侍ィにしてとらす。ア、有難い。其お詞に違ィなくんは。御新筆の包ンで有ル。雪の下タの帕私に下さりませ。ホ、望ムも道理。獨といふ獣の腹ごもりの毛を取リて。雪の下の唐草を織込し希代の唐織。いか成ル打身金瘡にても影をうつせは。即座に直る重宝。望ミに任セお身に得さすと投出せは。ア、忝し。此帕は武兵衛が家のたから物。ヲ、此一軸平太が肌を放さねは。かゝる大事外カへもるゝ気遣ィなしと。互ィに点きさゝやく後へ太左衛門。申々ひら様。今（38オ）奥の亭座敷から見ますれは。安森源次兵衛殿が。ホ、此所へ見へる筈。毎日衣紋坂の薬湯へ。躬や嫁を連レて入湯と聞キ。使ィをもつて源次兵衛を招きよするも。吉三をせこめてお七が縁を切ラそふ為。何ンと武兵衛嬉しいか。ハイ。日外寺での意趣も有。此武兵衛が出合ッてはいな物。ヲ、それ〳〵。見付られぬ様に両人共。裏の路次より早く〳〵。畏ッたと猫の声聞ク鼠のごとく。二人はこそ〳〵立帰る。

傾城八重菊奥より出れは。目早き禿かアレ〳〵。何かこはいやら。武兵衛様ンや太左様がはづさんすと。いふをせいして。コリヤさす人がくる。両人共に何ンにもいふなと。ひそめく所へ亭主が案内。安森源次兵衛吉三お雛を相ぐして座敷へ通れは。コレハ〳〵。此間は打たへ旅（38ウ）宿へもお尋申さぬ。イヤ平太殿。それはお互ィ。今日お気ばらしに是へお出なされしとて。躬やよめをつれて。拙者にも参る様にとお招きに預り。湯を早く上つたれ共最早晩景。お待遠に思召ふ。ナン

ノ〳〵。御酒嫌ひな源次兵衛殿。色酒一献といふも不調法。しかし。御子息へ御内意申たい事も有リと。いへ共吉三が打とけぬ目色を見て取ル源次兵衛。コレハしたり。漸〳〵此間寺から帰りし躰。都の御所て育つた嫁。全盛なお傾城に気を呑れて。稲垣殿へ御挨拶もせないか。イヤそふでござらぬ。日外おぢ御十内殿の屋敷にて出合イ。為を存しいふた事もあれは。此平太をけむたく思ひ。それゆへの不興顔じやな。イヽヱそれは平太様のお気の廻り。此雛を媒のお前じや物と。いふ（39オ）を打けし。本郷の八百屋が娘に心中立テ。御主人より給はりし嫁を嫌ひ。媒の此平太を踏付ケにお仕やるかと。かさにかヽつてきめ付クれは吉三郎。日外といひ今といひ。重ね〳〵の雑言。イヤちよこざいな。平太に向つて反打ッかと互イに色立見へけれは。

源次兵衛中に隔り。イヤア躰ひかへい。イヱ余り成ルいひたいがい。サアしづまれといはゞしづまれ。ナニ稲垣殿。躰が不届キを御異見なさるヽお志は忝イが。此源次兵衛は其元に又御異見が申たい。ムウ平太に異見とは。ハテ湯島の重宝松竹梅の神筆。詮義の役目を蒙りながら。お若イと申ても余り成ル放埒。イヤ拙者が傾城狂は主君への忠義。盗手のしれぬ一軸。遊興に事よせ。諸人に交て詮義致すが（39ウ）放埒でござるかの。今宵爰に其元をとめ置キ。色気のない遊びお目にかけふと。いへはお雛が気の毒げに。そふおつしやつても舅御様は御病中。雨もどふやら降そふな。イヤ雨が降ふが鑓が降ふが。今のごとき批判を受ケたれは。平太が忠義の潔白を。お目にかけねは武士が立ぬ。スリヤどふ有てもお止なさるヽじや迄。ヲヽおんでもない事。ムヽ親人がいやとおつしやつたら何ッとなさると。さし出る吉三を父がねめ付。コリヤだまれ。身は平太殿と跡より帰る。そち達は勝手に待タせ置イた角介をつれて先キへ帰れ。ハア。然らば私は。日本提の桶

守に頼置キし用事もあれは。くれぬ内にと立上れは。ソレ〳〵お雛。吉三郎を手放して。本郷へ抔やるまいぞと。法界りんきの平太がさいばい。アイと計に赤らむ顔。夕日を覆ふ雲の足。風を誘や。雨催ひ引連レて。こそ（40オ）立帰るさの。夕まぐれ。雨しん〳〵たる衣紋坂。相合傘の。しよんぼりと。吉三郎に一対のお雛が思ひやるせなき。つがい離ぬ濡鷺と。せめて人目にみらるゝがわしや嬉しひと取すがる。心隔し。中〳〵に。只一本ンの傘も。日本堤にさしかゝり。ゆんでの方を見渡せは。白波はしる二挺立。南ミは両国橋のうへ行かふ人の挑灯は。夏のかた見の蛍火かそれかあらぬか稲妻のヲヽこはやのをしほにして。抱付を吉三郎ひんとすげなくふり放す。袂にお雛は取付イて。此程お傍に付そふて。あひ見る事の嬉しさも。恨にかへすとは誠成ルかな恋の闇。いやがらんす程猶。思ひはまし。（40ウ）

おうばを頼ミ色々といふて見てもくどいて見ても。お七殿に義理立て云号の此雛に。物さへろくにいはしやんせぬ。其立ぬいたお心をせめてわしにも百歩一。あやからしてくれたがよいと。じつとさし込ム手先キには。いかなる恋やこもるらん。ヲヽ其恨は皆尤お七が事を知リながら。あいそもつかさず其様に。いふてたもる志嬉しうは思へ共。心とけぬは恋路の義理。必恨てたもんなと。互イにとけぬ胸の内。堤づたいひに。うさつらさ身をしる雨にかき曇。濡にぞへぬるゝ傘を恋の輪廻のわれからとくる〳〵〳〵。くる〳〵くるりと振かたげ。さすかいもなき相合の。かさを嵐に吹立られろくろをくゞる雨雫。かゝる二人リが身の行衛。歩兼たる風情也。（41オ）

道におくれし奴の角介。ヲイ申若旦那お待なされと。菅笠に肩まくりして走リ付。おまへ方は相合傘の濡事で。果まいと思つたに早いお足。けふ此堤で鷺草を切ルとて。お落しなされた小刀は。ホンニお雛の道草でとんと忘レた。尋てくれい

と頼置ィた。樋守が番屋は此傍と。見廻すこなたの番小屋の。戸を押ひらき。ぬつと出るは樋守与五蔵。はちまきの手拭取て。吉三が腰をほと、打。さつきにからこな様方の。ちん〳〵咄を聞て居たがヱうまいな〳〵。番屋をかすべい。序に鱠もらしやんせ。ヲ、あの人はいのとつけもない。そりや何ンの事ぞいの。ホ、御合点がいかないか。此吉原の廓では。だかれてねる事を鱠といひます。あの前髪様が。お七といふおてきに心中立テぬい（41ウ）て。今の様に間に合ィいふてだまさんすを。廓ではかけるといふ。あんまり気強ふいはず共。ちやつと居膳くはしやませと。おどけか、れは吉三郎。コレ与五蔵。おれが落した銀の三疋獅子の小柄。尋てたもつたか。イヱまだでごんす。夜さへあけたら。此日本堤八丁の間を尋。小柄はおらが持ッていて上ケませふ。所はどこじやおつしやりませと。聞てさし出る奴の角介。こちの旦那は。安森源次兵衛様といふて。ム、そんならおまへは。御子息の吉三郎様かい。それにお云号のお方とあれば。此間薬湯伝七方で聞及んだお雛様。ヲ、いかにも〳〵。手前親共が旅宿は是より見ゆる。千住の町の貸座敷と。咄の半そりや光ッたはと一度に仰天。ひつしやりごろ〳〵こりやたまらぬ。サア〳〵旦那お急キと。角介に（42オ）せり立られ。そんなら与五蔵小柄の事を。頼む〳〵も頼がたなき秋の空。又降しきる雨の足。急てこそは帰りける。

目ざすもしらぬしんのやみ雨具に事を柿暖簾。遊び過コして立帰る三界無安の快典が。菰俵を引かぶり。火縄もふつて堤伝ひに。かけくる跫ちらりと見るより。梟頭まてと雷声。ヤア与五蔵か。何ンの用じやと菰はねのくれは。雲突計りのいがくりあたま。雨の夜すがら所から高入道共いつ、べし。コリヤお坊ン。跫でもわぬしと知て番屋を出てきた。兼て咄のほうびの金。今ン夜は慥にしこためて戻つたそぶり。サア分ケまへ貰はふ。ハアレけちぶとい。分ケまへとは何ンの事。

ハテ此廓で自囉でもなゝでも。ふてうまへをおれにくさねば。腰に付ケた此柝であたまを（42ウ）梨割。それでもいやかとのぶとふかゝれは。ハ、、、、此坊主首を投出して。去ルお方に頼マれまんまと仕おふせた。其ほうびにしてやる金。与五蔵。我レに何ンの価にこませふぞい。ム、すりやどふいふてもくさぬかい。イヤ今ン夜も先キにさし構に成ル連衆が有とて。おれがやつた手紙さへ封をも切ラず。こりや見い。此儘で戻された。近い内に金受取たら。酒代程はどふもせふ。雨のおやみにおりやいぬると。かけ出すを引ずり戻し。ヤイけづり廻しめ。酒代ごかしに酔すない。貰た金を隠せはかうじやと懐へ。ぐつと突込手先キにさはる件の一通。見せては大事と快典が。ばいかへして切封の。名書キを口にてくいさけば。どつこいさせぬと手紙をもぎ取リ。与五蔵が懐中すれば。

それとられては一大事。隠す程猶見にやおかぬと。（43オ）組合ィ捻合泥まぶれ。どろ〳〵ぐはら〳〵雷稲妻。ひつくりかへして与五蔵が。なんなく上に乗かゝり。ヤイ願人め。此堤で送柝打ッて。樋守の役目勤ながら。かふした働する事を。うぬにしられた上からは。いやでもおうでも助ちやおかぬ。引ッたくつた手紙をとつくと読で。金設はおれがする。そふ心得てくたばれと。有合ッ火縄を首にまとふてぐつとしめ付ケ。やみは危し危き思ひ。引よせて鼻へ手を当。ホイさつても早ふてこねたと。引かづいて前ェなる深田へ打込ムはづみ。落しおいたる吉三が小柄。天窓へぐつしやり気付針。息吹かへして七顛八倒はい上る。与五蔵透さず踏落し。水抜の樋ぶたを上へ引上れは。

漲水に死物狂。樋口へがばと踏込ムをひぶたをばつたり快典は。地獄おとしの鼠のさいご。柝おつ取くはつち〳〵。

空には雷電道を照してへ走り行（43ウ）

二上リ哥中ウ
うつゝのやみにちる花の。思ひなき身にくらべこし。さつと浅黄に染ふより。元トの。白地がましじや物。去ルにてもうし
や夫の。にせ柴が色わるふ。やつれ。顔見る悲しやと。三味のねじめの。いとしほらしく。軒端洩くる一トふしや緑の。
竹の青〳〵と。塀を打越シ見越シの亭の高欄に。都模様のだて小袖。かけて干てふ。野分の風に。ひら〳〵と。庭の紅葉の
色そいて。よその見る目も媚し。表門の評札に。京都安森源次兵衛。旅宿所と書キしるす。所は千住の町はづれ。父
のるすとて吉三郎。二階座敷に挽茶磨。ねむたからふとお乳の人。鳥の翮にて茶入にうつし。ヲ、和子よつほど溜つた。ち
つと休てお雛様ンの。一トふしに（44オ）心を付ケてお聞なされ。さつと浅黄に染ふより。云号のないさきの白地がましじ
や。江戸紫のお七上郎に見かへられたと。歌によそへてのくどき言ト。あんまり憎ふは有ルまいがなと。いふ声下タに洩聞お
雛。ア、嬉しいおうばの志。難面は吉三様ン。いやなら此身はこがれじに。心のたけを三味線に。のせて諷ふが二階へ
は聞へぬか。しぼる袂の露涙。のべもいくへを。通すらん。アレ聞カしやんせ。あの様にお雛様のいとしらしひ歌と三味。
イヤ茶に挽入ッて居るゆへか。おれが耳へは何ンにも聞へぬ。フウよい手な事計リ。お七殿に義理立テてそふおつしやるか。
イヤ是うば。其様にお七の噂してたもんな。親仁様のお耳へ入ルとお叱を受るぞや。（44ウ）サアそれがいやなら。夕衣
紋坂の戻りに。なぜお雛様にすげなふなされた。ナンノそふではなけれ共。親人も平太殿も。吉原の廓にお残りなさるゝ。
衣紋坂からつゝぷりと日はくれる。雨風は頻也。それで一もくさんに先キへ戻つた。ソレ其様な水くさい事が有物かいな。
お供にいた角介さへ笑止がつて。お雛様の手を引まして戻つたげな。道はくらし雨はふる。脇指が鞘走て手を切リ。あの
子の小袖迄が血みどろ。まだ洗ずにあれ。高欄にかけて有ル。今からちつと嗜しやんせと。ずつかりいふも養君。い

としさ余る異見也。

お雛はしと〳〵。二階へ上り。ナフおうば。よしない事をいふて。吉三様ンにさからふて下さんな。わたしが様なふつゝ（45オ）かな。京の風がおいやなら。八百屋の娘お七殿の様に。江戸の風を随分見習ひ。とふぞしてしめやかに。おまへのお気に入たいと真実ほれぬく生娘の。心を察してお乳の人。コレ吉三様。いつ迄もそれでは済マぬぞへ。否か応か返事なさい。ア、何しにあの人を嫌はせね共。寺に居る内お七と。みだらな事の有ッたあげくゆへ。祝言の盃する迄。かたくろしう見せるは。親人の手前を思ふての事。必恨て下さんなと。なだむる詞にお雛は嬉しくそりやほんかいな吉三様。ナンノ嘘をつこぞいの。サアそしたら親旦那のるす事に。お傍へ寄てついちよつと。抱付ヵしやんせと押やられ。じつとしめあふ初恋路。よきなき風情に（45ウ）見へにける。ヲ、それでこそよけれ。今からお雛様は御本妻。お七殿はお妾じやと。思はしやんすりや恨ミはない。此中も本郷から。使ィに見へたお杉とやらに。何やかや様子を聞キ。此うばが若時の。身につまされていとしい。ヤアそんならうば。そなたの身の上にも此様な。難義な事か有たかや。ア、有た段かいな。わたしは元ト京の町の性。男撰をして。御所方へお末の奉公に出たれ共。公家侍のなまぬかつたはいやで。どれかな是がなと。待テば甘露の雨降月。右近の馬場の引折の日。見物にいたれはな。何が馬が放れて。そりや蹴は。そりや踏はと人崩。群集の中ヵに。せいひくからず高からす。苦味の走ッたよい侍ィ。一ト目見るより。（46オ）ぞつとして思ひ付ィた恋の才覚。馬にこはかる振をして。抱付ィたれはあちからも此手をじつとしめて。互にちよつと名所いふて別レたが縁ンと成リ。それから月の内に五度三度の出合ィに。廬山寺の明ヶの鐘。度々聞ィた其おどもりがつい懐胎。やゝは安ふ産たれと。親達の頑

ゆへ水子を先キへ。わたしは直ク に此お家へお乳奉公。夫はどこに流労して居らるゝぞ。所が知リたい便リがしたいと思ふ余り。硯に向ふてぬしに咄する様に。かふ成ッた一部始終を書認て。肌身も放さず持ッて居ますと。守袋の紐といて取出す封文。表の名書キは見せね共。裏に媚く片仮名のより五大力。実も恋路の筆のくせ昔床しく吉（46ウ）三郎。お雛も奥に入相の。鐘かう〳〵と聞ゆれは。扨も〳〵秋の日の短ひ事はいの。さつきに角介を迎にやつたに。此とゝ様はなぜ遅ひ。イヱお雛様お案しなさんな。お台所迄衣紋坂の伝七が見へて。親旦那様は。廓から直ク に平太様と連立て。十内様のお屋敷へお出なさつたといな。ヤア親仁様が屋敷へとは気づかはし。それをおれにはなぜいはなんだ。伝七がまだいなずんは。様子とはんと吉三郎。勝手のかたへ急行。

二人ンもとつかは高欄に。かけし小袖を入れるやら。茶磨を床へ直すやら。二階の障子さしつどひ。見れは表の門前に。定紋付たる挑灯二張。稲垣平太源次兵衛。打つれ帰るくつたく顔。内より出る薬湯伝七。それと見て地に（47オ）鼻付ケ。コレハ旦那様只今お帰りでござりますか。ホ、伝七か。毎日行ク 薬湯へ。今日は懈怠せしゆへ見廻ィに来つたか。ハアいや私が近所に居ます。堤の樋守与五蔵といふやつ。おまへ様へちと御内意申てくれいと。頼ムゆへさんじました。ヲ、何かはしらず。内意とあれは密々に聞ふ。どうじや〳〵と耳さし付れは。伝七がさゝやく度々。源二兵衛が驚ク 面色。平太はどこやら気味わるく。さしよれはちやつとやめ。委細は今申上た通り。与五蔵へのお返事は。ヲ、後程其方迄返事せふ。ハ、アそんならお暇申ますと。そゝくさ帰る薬リ湯伝七。心に毒有ル平太は一円よめぬ顔。源次兵衛に誘引れ。玄関より次キの間の。上座へ通れは吉三郎。（47ウ）手づから挽し薄茶を立テて取あへず。平太が前へ持出る。ア、いや〳〵。心よか

らぬ茶は所望におりない。コレハ平太様に似合ぬ仰。イヤサ。夜前日本堤において。大それた事を仕出した吉三郎。詮義に来つた平太なれは。毒呑すまい物でもない。コハ身に取て覚もなき御一言ン。是は今日私が挽たる茶。自身にたべてお目にかけふ。ヤイ〳〵躰。其茶を是へもて。源次兵衛が毒試せふと。恵も深き井戸茶碗。おつ取て呑けれは。イヤ申平太様。此吉三が大それた事を致したとおつしやる。其子細はな。ヲ、今朝未明に。身共と源次兵衛殿同道して。新吉原より帰るさ。日本提へお身がおぢ十内殿。検使にたゝれしに行合イ。見れは水抜（48オ）の樋に切込マれて居るは。吉祥院の同宿快典とある。欠落せしやつなれは。相手しれぬ闇討と所の者共の口書キ。代官所へ納つて事は済ンだれ共。吉三郎が手にかけたといふ事は。平太が見付た。ヱ、イ。それは思ひがけなきお咎。ホ、慥な証拠が有ル。日外平太がお身にやつた。銀の三疋獅子の小柄。しがいの道筋に立て有た。察する所快典めが。盗ンで立退た。松竹梅の神筆を奪取て。ばらし召つたで有ふがのと。吉三を罪に落さんと巧底意ぞ恐しし。イヱ其小柄の義は昨日。にほん堤にて落した事を。親仁様も御存有て。サレバサ。色々と此親が云訳したれ共。小柄を証拠に稲垣殿の。疑イが晴ぬはい。（48ウ）然レ共源次兵衛はそふは思はぬ。トハ又なぜでござる。ハテいが成ル大丈夫でも。非道の筋にて人を殺した砌リには。一心狂て茶を挽ば。自然とあらくおりる筈。然るに只今呑ンだ薄茶の。挽加減の濃さ。吉三が身に覚のない事明白〳〵。ヤアそりや縁者の証拠ごくにたゝぬ。茶によそへて身がつてな云訳。たべ申さぬぞ。サア吉三。盗ミ取ッた松竹梅の一軸。速に御主人へさし上めさるか。隠すと代官所へ申遣し。十内殿に御詮義頼ムと。ぬきさしさせぬ権威の高声。覚なけれど吉三郎。云訳何とせんかたも泣より。外の事ぞなし。父も無念さ察しやり。此源次兵衛が何かといへは。身びいきのさたにおつる。じやによつて亭へ

（49オ）参つて休足仕る。稲垣殿御免ンあれと。気もせき上す段階子の。音トよりときつく。お雛が胸。打しほれ立出て。申平太様。日本堤に落して有た。三疋獅子の小柄で。快典はわたしが。殺しましてござんすと。いふに恂り吉三郎ア、是お雛。こなたはそりや何いはつしやる。サイナ。おまへは常々此雛を嫌しやんす心から。日本堤より先キへ戻つて御存はない筈。ヤア云号の夫トの難儀を救んと。かよはき女の身として。快典を殺したとは。庭の紅葉のてりはよりまつかいな赤嘘。アヽそふ思召スは御尤。吉三様のお寺にござんした時。お七を快典が。媒したといふたさかい腹が立て。だまし殺しにした証拠は。平太様もお（49ウ）お見知有ルわたしが着物。ひつたり血汐に染つて有と。さし出し見すれは。いか様是は生々敷血。きのふこなたが着ていた小袖に違ィはないと。いふに吉三が。イヤそれでもお雛は。人殺しではござりませぬ。イヱ〳〵。吉三様に科はないと。命を惜まぬ争ひに。平太怒て。快典はお雛が殺したにもせよ。松竹梅の巻物。盗取ッたは吉三郎さ。ヱヽそれはお情ない。イヤサ色にほうけた心から。盗ムまいとはいはれぬ。彼ノ神筆を習覚。湯島の天神へ松竹梅の絵馬を。奉納した程のお七なれは。ほしがるまい物でもない。ソヽそれはあんまりなお疑ひ。大切なる一軸を。何ンのお七に。やらぬといふ証拠が有ルか。サアそれは。（50オ）サア何ンとヽ。かさにかヽつてきめ付クれは。ハア。はつと二人は顔見合せ。云訳口を噤ばかりとかふ涙にくれにける。